音楽超大国，アイスランド
――音楽から見るアイスランド人のアイデンティティ――

文学部４年　永　井　真　美

［目次］

はじめに
１．音楽超大国，アイスランド
　Ⅰ　小さな音楽大国
　Ⅱ　「Icelandic Music」
２．アイスランド共和国
　Ⅰ　建国
　Ⅱ　アイスランド語
　Ⅲ　自然・環境
３．音楽と言葉
　Ⅰ　北欧多神教と伝統歌唱法
　Ⅱ　「言葉」としての音楽
おわりに
　参考文献・映画・ホームページ

はじめに

筆者が初めてアイスランド[1)]について話すとき，決まって相手から返される言葉は「え，アイスランド？」もしくは「アイルランド？」のどちらかだ。アイスランドは，世界中の大半の人々にとって馴染み深い国ではないらしい。日本の友人も外国の友人も，一様の反応を示すからである。アイスランドはイギリスの北西に浮かぶ，絶海の孤島である。どの大陸からも遠く離れ，また人口も少ないため，多くの人にとって馴染みが薄いのは仕方のないことなのかもしれない。

筆者がそんなアイスランドに強い興味を持つようになったきっかけは，音楽であった。もともと音楽鑑賞が趣味であったため，クラシックやジャズ，ロックに至るまで様々な音楽を聴いてきたが，アイスランド音楽のように優しく，力強く，壮大で，澄んだ音色を耳にしたことはなかった。初めてアイスランドの音楽を聴いたときの衝撃と感動は，今も忘れられない。

アイスランドには様々なジャンルの音楽を作成・演奏するバンドやミュー

ジシャンがいるが，筆者はSigur　Rós（シガー・ロス）[2] というバンドの音楽が，最もアイスランドの姿を表現していると考えている。2008年６月，筆者はついに彼の地を訪れた。実際にアイスランドの景色を目にした瞬間に，それは確信に変わった。彼らの音楽はアイスランドの自然や空，そしてアイスランド人の心そのものと言ってよい。

本で得た知識はいくらかあったが，数日をアイスランドで過ごし，初めて知り得たこともたくさんあった。文献による情報だけでなく，自分が実際にアイスランドに赴いてわかった多くのことを含め，音楽が表現するアイスランドの姿，アイスランド人のアイデンティティを明らかにしていきたい。

１．音楽超大国，アイスランド

Ⅰ　小さな音楽大国

アイスランドは，北大西洋に浮かぶ欧州で二番目に大きな島である。国土面積は，日本の北海道と四国を併せたよりも少し大きいくらいだが[3]，人口はわずか31万人で，その数は筆者の住む和歌山市の人口よりも少ない[4]。

しかしアイスランドの音楽人口の割合は大きい。小国と言われるアイスランドだが，国立交響楽団や軍楽隊もあり，私立交響楽団の数は400を超える。また合唱団も数多く設立されており，合唱団員の人口は6000人を上回る。それは，国民の50人に１人が公的な団体に所属し，歌っているということになるのだ。もっと私的なミュージシャンともなれば，もはや数えることは出来ない。ただしアイスランドのミュージシャンは，大半が副業として活動している。

アイスランド人にとって，歌うことや音楽を作ることは，特殊な能力ではない。アイスランド人は，憩いの時間に作曲し，それを家で録音して，気に入った曲を友人たちと一緒にCDにする。それが，彼らの日常なのだ。それを証明するかのように，アイスランドの筆者の友人はみな趣味で音楽を嗜み，中にはプロに近い音楽活動を行っている知人もいる。また，友人の母は合唱

団に所属している。彼らは，決して特別な人たちではない。ごく普通の会社員であり，学生であり，主婦である。アイスランド人にとって音楽を奏で，歌うことは，生活の一部なのだ。

筆者は７日間の滞在で，３回もコンサートへ行く機会を得ることができた。一つ目はアイスランドを代表する，世界的アーティストのBjörk（ビョーク）とSigur Rósによる，無料の野外コンサートだった。このコンサートには２万５千人以上が来場したそうである。会場には子供連れの親子から老人まで，幅広い年齢の観客がいた。それは世代を問わず，アイスランド人が音楽好きであることを実感した機会であった。二つ目は複数のアマチュア・バンド（中にはCDを発売しているプロもいたが）による無料の街頭コンサートである。その会場でも，様々な年齢の観客がいた。通りすがりに足を止めてコンサートを覗く人々も多かった。三つ目は，首都のメインストリートにある小さなバーで行われた無料のコンサートであった。店に入りきらないほど多くの若者が集まり，みなが熱心に音楽に聞き入っていたことが印象的であった。その他にも町中では，数多くのコンサートのポスターやチラシを目にした。アイスランドにおいてコンサートは，日常的な出来事なのである。

Ⅱ　「Icelandic Music」

アイスランドには，実に多種多様なジャンルのミュージシャンがいる。その中でも筆者がアイスランドの姿，アイスランド人の心を最も表現していると考えているSigur Rósの音楽は，音楽の専門的な用語でポストロックといわれるジャンルに分類される。

ポストロックは，従来のロック・ミュージックの精神を残しつつも，楽器やリズムなどで，それまでのロック・ミュージックとは違う表現方法をとるものである。また，オーケストラを使ったクラシック音楽的なメロディーや，歌のない曲が多く見られるのが特徴とされている。つまりこのポストロックという言葉は，特にSigur Rósの音楽だけを指すのではない。他国のミュージシャンによって作られた，類似した音楽もこのジャンルに分類されるのだ。

しかし筆者は，アイスランドの音楽を，他国の音楽と同種とするジャンルに含めるのは適切ではないと考えている。 なぜならSigur Rósは勿論のこと，どんなジャンルに分類される音楽でも，アイスランドのミュージシャンが作る音楽は，他国の音楽とは明らかに違うものが感じられるからだ。筆者は，アイスランド人ミュージシャンが作る音楽に対しては，リズムやメロディーによる従来の分類ではなく,「Icelandic Music」と言う新しいジャンルを作り，当てはめるべきだと考えている。

では,「Icelandic Music」に見られる独自性とは何なのか。それには，アイスランドが持つ独特の環境や文化が大きく影響している。アイスランドの音楽には必ず，アイスランドの自然とアイスランド人の心，すなわちアイスランド人のアイデンティティが表現されているのだ。そしてそれらが，アイスランドの音楽に，他国の音楽にはない神秘的な魅力を持たせる大きな要因にもなっている。「Icelandic Music」に存在する，アイスランドの姿とはどんなものか，ひとつずつ明らかにしてゆきたい。

２．アイスランド共和国

Ⅰ　建国

アイスランドは元来，無人島であった。アイスランドの歴史が記された『サガ[5)]』のひとつ『Íslendingabók（アイスランド人の書）』やその他の書物によると，８世紀末には数人のアイルランド人修道士が修行の一環として，アイスランドに腰を落ち着けていたらしい。だがその修道士たちは，ヴァイキングが偶然に島に流れ着いたとき，恐れをなしてすぐにその地を去ってしまった。一方ヴァイキングたちは，アイスランドに暫く滞在したものの定住するに至らず，アイスランドは再び無人島となる。しかしこの滞在がきっかけで，ヴァイキングの間に「アイスランド」という広大な無人島の存在が知られるようなった。アイスランド人の祖先は，主として元ノルウェー人である[6)]。しかし「ただの元ノルウェー人」ではない。それこそが，アイスランド人の

アイデンティティを確立する，大きな理由である。

「ただの元ノルウェー人」でない人々がアイスランドに移住を始めたのは，870年頃である。当時ノルウェーでは，ハラルド美髪王[7]による，建国以来初めての全土統一が行われていた。王は，進んで自らの臣下になる者に対しては寛大であったが，従わない者に対しては容赦がなかったという。しかし当時は，スカンジナビア諸国のヴァイキングたちが名を馳せていた時代でもあった[8]。ヴァイキングは自立心が高く，また，強い自信と大きな誇りを持った男たちである。ノルウェーも，多くのヴァイキングが誕生し，生きる国であった。そんな崇高な自立心を持つノルウェー・ヴァイキングたちが，突如君臨し，権力を振りかざす王の臣下として生きることを快く思うはずがなかった。そのため一部の人々がヴァイキングとしての誇りと自尊心を守るため，かつて発見した無人島を目指した。そして建国されたのがアイスランドである。930年のことであった。

最初はわずか数百の人々が作り上げた，ヴァイキングの理想郷といえるアイスランドであったが，1262年から，ノルウェー，そしてデンマークの統治下に置かれてしまう。しかしアイスランドを建国した祖先の志は常にアイスランド人の中で生き続け，ついに1944年，彼らは682年にもわたる他国の支配下から独立を勝ち得た[9]。困難を乗り越えることで，アイスランド人が母国を愛する気持ちは一際大きいものとなり，建国当時から人々が心に宿していた自尊心と独立心の高さは，現代のアイスランド人にもしっかりと受け継がれている。アイスランド人は，様々な困難を乗り越え，自らの理想国家アイスランドを建国し守ってきた祖先に対し，たいへん大きな誇りを抱いている。そしてアイスランドという国を，かけがえのない存在として愛している。

筆者がアイスランドを訪れた際も，アイスランド人が自国に持つ誇りと深い愛を実感する機会がたくさんあり，その気持ちに強く心を打たれた。たとえば，筆者の友人を始めとして，専門的な研究の経験がない若者でも国の歴史にとても詳しい。アイスランドの歴史上で重要な場所を友人に案内してもらった際，彼らは観光ガイドに載らないような，その土地に関する詳細な歴

史を幾つも教えてくれた。日本の若者がいかに自国に対して無知であるかは，外国の友人と接することで身に染みて感じてきたが，アイスランドの若者ほど自分の国の歴史に詳しい若者は，他の国にはそう多くないのではないだろうか。

また，昨今の日本ではほとんどその機会はないが，外国に行くと，店先やそれぞれの家庭で国旗を掲揚しているのを目にする。アイスランドに行ったときもその光景は目にしたが，別の国にいるときよりも，ずっと機会が多かった[10]。そしてアイスランドのそれが他の国と違って興味深いのは，国旗を，掲揚するのではなく窓際のディスプレイの一部として飾っていることである。また，たとえ掲揚してあったとしても，それはよほどの観光地でないかぎり，至極小さなものであった。アイスランド人の典型的な人物像は「寡黙でひかえめ[11]」だそうである。国旗も，玄関先に大きく掲げるのではなく，ひかえめに飾る。しかしその数は他の国に比べてずっと多く，堂々と主張することは苦手でも，国を愛する心はしっかりと表している街の景色は，いかにもアイスランドらしいと感じた。ちなみに，2008年10月，筆者はSigur Rósの来日公演を訪れた。ステージ裾を覗くと，多くの音楽機材の中に，小さなアイスランドの国旗が２つ掲げられていた。これまでに筆者が行ったどのミュージシャンのコンサートでも，彼らの出身国の国旗を見かけたことはない。しかしSigur Rósのステージには，演奏に必要な機材と同様に，そこに当然あるべきもののように国旗が飾られていた。

たかが国旗と考えるかもしれない。しかし国旗は，簡単に表現できない国というものを，それ一つで明確に象徴できる唯一のものである。国旗を掲げることは，自分の国に深い関心を持ち，誇りに思っていることを視覚的に表現できる，数少ない方法のひとつではないだろうか。自らの手で築き上げ，多くの壁を乗り越えて守ってきた祖国にアイスランド人が抱く誇りと愛は，とても大きく深いものであると知った。

Ⅱ　アイスランド語

アイスランド人が守り続けてきた文化の，代表的なもののひとつに，アイスランド語がある。アイスランド語は，９世紀頃ヴァイキングによって話されていた，北欧語と呼ばれる言語である[12)]。この北欧語から，21世紀現代のアイスランド語はほとんど形を変えていない。北欧語は,『サガ』に記されている言葉や現代アイスランド語がそうであるように，文法も発音も大変難解な言語であった。

先述の通り，アイスランドは長年にわたって他国の支配を受けてきた。アイスランドが他国の植民地となった頃には，北欧諸国はそれぞれ独自の言語を使用するようになっていた。いつしか北欧語を話す国はアイスランドだけとなり，北欧語はアイスランド語と呼ばれるようになった。ノルウェーや，その後アイスランドを支配したデンマークの人々は，言語が壁となり，アイスランドの全てを把握できずにいた。完全統治を目指す支配国は，アイスランドの言葉を自国語に変えさせようとしたが，アイスランド人は決してアイスランド語を捨てなかった。

2006年までアメリカ軍基地があったことや，デンマークによる支配の名残から，アイスランド国民の大半は，少なくともアイスランド語，英語，デンマーク語を操るマルチ・リンガルである。しかし，法的に認められた公用語はアイスランド語のみである。他国による支配がなくなった後も，アイスランド人はアイスランド語を守ることに尽力し続け，現在も外国語からの借用語が極端に少ない。今までにない語彙が必要になったときは専門の委員会による審議が開かれ，アイスランド語の語彙を複合して代用する。たとえば「TV」という語も，アイスランド語には存在しない。「見る」と「放り投げる」を併せた「sjónvarp（ショゥンヴァルプ）」と言う，完全なアイスランド語が利用される。さらに驚くべき事実として，現代のアイスランド人は９世紀に記された『サガ』を，ごく一般的な書物として読むことが出来る。私たち日本人が『万葉集』や『源氏物語』を読むために特殊な訓練を積まねばならないことを考えれば，アイスランド人が『サガ』を，翻訳や特別な学習なしに読

み進められることがいかに驚異的か，分かるであろう。

アイスランド人がアイスランド語に固執するようになったきっかけは，他国からの干渉を最低限に抑えたいという，非常に政治的なものであった。しかしいずれにしろ，彼らがアイスランド語を維持した意志は大変強固なものであり，それは政治的な干渉を避けるためだけに留まらず，自国の文化やアイデンティティを守るためであったことも，確かな事実である。アイスランド語は，現在世界で使用されている言語の中で最も複雑で難解な言語の一つであるといわれている。しかし彼らはその言語を今日まで守り続け，2008年現在，アイスランドの識字率は100%を誇る。これは現代アイスランド人が，アイスランド語を通じて，自国の誇りと文化を国民全員で守っていることの証明ともいえるだろう。

「Icelandic Music」にも，アイスランド語が使われている曲が数多くある。アイスランドのミュージシャンは，その他の多くの国民と同様にマルチ・リンガルである。それは，彼らの曲に他国語のものがあることからもわかる。しかし，どのミュージシャンのCDにも，必ずと言っていいほど，アイスランド語の曲が含まれている。彼らがアイスランド語で歌うことは，他国のミュージシャンが自国の言語で歌うことよりも，もっと深い意味がある。アイスランド語はアイスランド以外ではほぼ話者がおらず[13)]，また第二言語としての修学も他国でほとんど行われていない。そのため世界中の大半の人はこの言語を理解できない。しかしSigur Rósを始めとしたアイスランドのミュージシャンたちは，多くの楽曲で，彼らが守り続けてきたアイスランド語を利用する。音楽に自国の誇るべき言語を載せ，全世界に発信する。それは彼らの「私はアイスランド人だ」という静かで，確かな主張なのだ。

Ⅲ　自然・環境

アイスランド人が守り続けてきた文化は，言語だけではない。彼らは自らの祖先に深い尊敬の念と誇りを持つのと同様に，国の環境や自然に対しても強い愛を抱いている。

アイスランドはヨーロッパで二番目に大きな島であるが，人口は極めて少ない。人口密度は１㎢当たり2.8人で，アイスランドの大半の土地には人が住んでいない。実際，アイスランドの国土の３分の１は氷河に覆われており，また内陸地は環境があまりに厳しいため，居住に適さない。人口は気温のあまり下がらない沿岸部に集中しており，アイスランドの首都レイキャヴィクには，総人口の３分の１に値する約12万人が住んでいる。そのため例外的にレイキャヴィクには多くの家やオフィスビルが立ち並ぶが，アイスランドには多くの自然が残っている。

アイスランドはその国に関する本にいつも「不毛の大地」と表される。実際，筆者が初めて飛行機から目にしたアイスランドの景色も，それ以外に言葉が見つからないほど，荒涼としていた。窓の外には黒い大地が広がり，木は一本も見当たらず，全く人の気配がない。しかし，いざ地上に降りてみると，その印象は大きく変わる。不毛に見えた大地には，夏場，色とりどりの小さな花が咲き乱れ，ある場所には目が覚めるような水色の池が点在する。その他にも，広大な氷河や，活火山，20mもの水柱を吹き上げる間欠泉や，膨大な水量と落差のある滝，地球の圧倒的な迫力を目の当たりにできるギャウ[14]がある。不毛と呼ばれるアイスランドは，実は人間の手が加えられていないありのままの自然が多く残る，貴重な国なのだ。

無論，アイスランドの豊かな自然は，決して勝手に残っている訳ではない。アイスランドはどの国にも引けをとらない環境先進国でもある。アイスランドには多くの滝や温泉があり，それらを利用して，国内全ての電力をクリーン・エネルギーでまかなっている。そのため，アイスランドの空気は驚くほど澄んでいる。その証拠に，地球温暖化抑止の取り組みの一環である京都議定書において，アイスランドに課せられた温室効果ガスの削減目標数値は110%，つまり＋10%である[15]。ほとんどの国が数十%の削減を早急に迫られている中で，アイスランドは大変優秀な環境保全レベルを守っているのだ。また，アイスランドで唯一と言ってよいほどの温室効果ガス排出の原因となっている車についても，現在国家が率先してハイブリッド車への切り替えを

進めている。2003年には市内を走るバスは水素をエネルギーにして走るハイブリッド車になった。アイスランド人は，アイスランドの自然を誰よりも深く愛し，それを守るために全力を尽くしている。

またアイスランドの美しい自然は，大地に広がるものだけではない。アイスランドは北極圏の真下に位置するため，夏は白夜が続き，冬にはオーロラが出現する。オーロラは北極圏に近い他の国々でも観賞出来るが，通常オーロラ観測をする際には,重装備で自然の深い森などに行かなければならない。防寒対策を怠ると，凍傷や，最悪の場合命を失う恐れもある，非常に危険を伴うものである。しかしアイスランドにおいて，オーロラ観賞は特別なことではない。晴れていれば繁華街にいながら，オーロラが見られる。さらになんと，湖面に映るオーロラを楽しむこともできるのだ。潮流があり，塩分のある海水が凍らないことは，他のオーロラが観測できる国でも格段珍しいことではない。しかし，オーロラが出現する極寒であるはずの状況において，内陸地の流れがない真水の湖が凍らないというのは，アイスランド以外でまず考えられないことである。アイスランドでのみ起きるこの特殊な現象の要因は，周辺を流れるメキシコ湾流という暖流にある。他に類を見ない手軽なオーロラ観賞は暖流の恩恵であり，アイスランド人にとってオーロラは，なくてはならない冬の風物詩なのだ。

アイスランドには，たくさんの色が溢れている。黒い溶岩の大地，色とりどりの花，セルリアンブルーの池，オーロラ。それらのコントラストは，言葉に表せないほど美しい。また白夜の太陽が照らすアイスランドの澄んだ空と果てしなく広がる土地は，昼とは違った色を見せる。ヴァイキング文化を持つ他国の人々も，太陽に対して特別な感情を持っている。しかし安住の地を離れ，一から国を築き上げたアイスランド人にとって，暗闇と寒さと食糧難をひたすら耐え忍ぶ冬の終わりを告げる太陽は,まさに希望の光であった。大地を照らす太陽の光や，春の訪れを告げる花の色を，アイスランド人がいかに貴く感じていたか，常に太陽が輝き，緑の豊かな日本に住んでいる私たちでは，到底図り知ることはできない。

Sigur Rósの音楽には，このアイスランドの雄大で美しい自然が表現されている。彼らはあらゆる楽器で，アイスランドの自然の美しさだけでなく，自然の力強さや厳しさ，そして優しい太陽の光を表している。彼らの音楽を耳にしたとき，たとえアイスランドの自然を知らない人でも，きっとその景色が目の前に広がるはずである。

３．音楽と言葉

Ⅰ　北欧多神教と伝統歌唱法

世界中にごまんとある音楽の中で,「Icelandic Music」はひときわ強い存在感を放っている。「Icelandic Music」に，アイスランド特有の自然環境や文化が影響しているのは明らかである。中でも，建国当時からアイスランドに深く根付いている北欧多神教からの影響は大きい。

北欧多神教とは，アイスランドが建国されるずっと以前から，北欧で厚く信仰されていた宗教である[16)]。この宗教はヴァイキング文化を持った国の人々が好んで信仰していた，北欧土着の宗教であった。アイスランド人も，他のヴァイキング文化を持った人々と同様に，北欧多神教を信仰していた。しかしこの北欧多神教は，キリスト教の普及と共に，北欧諸国で急速に力を弱めていく。

だがアイスランドだけは,他の北欧諸国と同じ道を辿らなかった。西暦1000年にはアイスランドでも，全国民を対象にしたキリスト教への改宗が行われた。しかしこの改宗は，アイスランド人の精神的な変化によるものではない。アイスランドという小国が，宗教の違いによって二分され，国力が弱まることを避けるための防衛策でしかなかった。

ともかく1000年，アイスランドは表面上，キリスト教への改宗を行った。しかしアイスランド人はキリスト教を国教とした後も，民主議会「Alþingi（アルシンギ）」によって，北欧多神教に基づく文化や考え方を密かに続けることを合法的に許可した。このおかげで，他国ではほぼ潰えてしまった北欧

多神教の文化を，アイスランドは今日まで守り続けることができたのだ。

そしてこの北欧多神教に深くかかわる文化の中に，Rímur（リームル）とTvísöngur（トヴィソングル）と呼ばれる，伝統的な歌唱法がある。このRímurとTvísöngurは元々， 北欧多神教信仰国全てにあった文化であると思われる。しかし他国ではキリスト教化が進むにつれ，北欧多神教に関する文化は抑圧され，失われていった。また他の北欧諸国には，RímurとTvísöngurに関する情報はおろか，北欧多神教に関する文化の詳細な記述がほとんど残っていないようである。したがって，筆者はRímurとTvísöngurをアイスランドのみに根付いた文化・風習だと考えている。ただしRímurは，正確にいうと歌唱法ではない。古代詩などを，独特のリズムや抑揚をつけて朗読する方法である。しかしRímurが歌唱法でないと言っても，筆者には「声」という楽器がメロディーを奏でているように聞こえる。アイスランドは資源不足からか，他国ほど楽器が普及しなかった。そのため，楽器に頼らない歌が発達した。アイスランドでは，歌こそが音楽であった。さらに，現在このRímurを世界に向けて発信しているアイスランドのSteindór Andersen（ステインドール・アンデルセン）は，Sigur Rósを始めとして多くのアイスランド・ミュージシャンとコラボレーションし，Rímurを音楽のひとつとして表現している。そのためこの論文では，あえてRímurもアイスランドの伝統的な歌唱法として位置づけたい。

RímurとTvísöngurはいずれも，音楽でありながら，楽器を一切使用しないことが大きな特徴である。RímurとTvísöngurは北欧多神教に基づく文化であったため，キリスト教教会はこれを禁止したが，元々キリスト教の教えに従って改宗を行ったわけでないアイスランド人は，それまで歌い継がれてきたRímurとTvísöngurを愛し，守り続けてきた。さらに，Sigur Rósを始めとした「Icelandic Music」の特徴として，悲哀に満ちたメロディーと独特のリズムがある。「Icelandic Music」にある独特のリズムは，アイスランドのみに残る「歌の音楽」と，宗教歌に留まらず世俗歌も歌われていたTvísöngurのリズムが強く影響していると考えられる。また悲哀を感じさせるメロディーについては，アイスランドに伝わる多くの物語に悲劇的な要素が強いことから，関連性を

見出すことができる。北欧多神教に関する物語にも，いわゆるハッピー・エンディングは少なく，Rímurで歌われる物語や『サガ』の悲劇性が，「Icelandic Music」の悲哀に満ちたメロディーに影響を与えているのではないだろうか。

アイスランドの荘厳で雄大な自然と，アイスランド人の祖先と母国への愛が「Icelandic Music」の核となっているのは明白な事実である。そこにRímurとTvísöngurが加わることで，「Icelandic Music」が完成する。アイスランドの自然と，独特の音楽文化，そしてアイスランド人の誇りとアイスランドへの深い愛が，ひとつとして欠けることなくすべてが絶妙に融合して初めて，世界に例を見ない，儚く，力強く，美しい「Icelandic Music」という音楽が生まれるのだ。

Ⅱ　「言葉」としての音楽

最後に，アイスランド人にとっての音楽，アイスランドにおける音楽の位置づけについて，ひとつの仮説を提唱したい。筆者はアイスランドにおいて，音楽は「言葉」になったと考えている。

その理由の一つ目に，アイスランド人が強くメッセージを発したい時，音楽を使うことを挙げたい。先述の，私がアイスランドで訪れたBjörkとSigur Rósのコンサートにおいて，彼らが訴えたかったことは，アイスランドや全世界の環境保全である。アイスランドは環境先進国であるにもかかわらず，地球温暖化の影響を強く受けており，数世紀の間に，海面上昇によって消滅するとも言われている。コンサートでは，BjörkとSigur Rósは歌を歌い，曲を演奏することで，「今以上の環境破壊を食い止めるために自分たちが出来ることはたくさんあり，そのためにみなで協力すべきだ」と強く訴えていた。このコンサートの名前は「Náttúra」，すなわち「自然」であった。

また，2008年夏からの全世界を巻き込んだ経済問題で，アイスランドは国家の存続が危ぶまれる危機に陥っている。2008年10月19日，私はそれに関するデモがレイキャヴィクで行われたというニュースをNHKのホームページで目にした。そこに映し出された映像は，抗議デモ会場でプラカードを持っ

て叫ぶ人々，そしてギターを片手に歌う男性の姿であった。私はその映像を見たとき，一瞬「自分の国が崩壊の危機に瀕しているのに歌だなんて，何てのんきな…」と驚いた。しかし「アイスランド人にとって音楽は言葉だ」という，自身が見出した仮説を思い出したとき，第一印象とは大きく変わり，あの場で歌った男性の本当の気持ちが理解できたように感じた。アイスランド人にとって音楽が言葉であるとしたら，彼はあの場で決してのんきに歌を歌っていたのではない。言葉で表現できない不安と怒りを，自分の感情を最もうまく表現できる音楽という方法を使って，声の限りに叫んでいたのだ。幾ら数々の危機や困難を乗り越えてきたアイスランド人とて，心から愛する自国が崩壊の危機に瀕しているときに楽しく歌を歌うとは到底考えられない。抗議デモで曲を演奏することは，アイスランド人が最大限に自分の感情を表現できる，最適の方法だったはずである。

二つ目に，インストゥルメンタルを挙げたい。インストゥルメンタルとは，歌のない，楽器の演奏のみの曲である。インストゥルメンタルの曲は，世界中にごまんとある。だが，インストゥルメンタルが「Icelandic Music」全体に占める割合は小さくない。また，たとえ歌のある曲であっても，「Icelandic Music」は「言葉に執着しすぎていない」という印象を受ける。その例のひとつが，ホープランド語である[17]。ホープランド語は，Sigur Rósが，アイスランド語を基に独自に作り出した言語である。しかしSigur Rósはホープランド語を，言語というより，音の一種として扱っている。ギターの弦をはじいて出す音と同じように，人間の体という「楽器」を使って出した「言葉のような音」として使用しているのだ。また歌のある「Icelandic Music」において，たとえ歌詞に彼らの伝えたいことが詰め込まれていたとしても，それがアイスランド語では，世界中の多くの人が意味を理解できない。しかしその意味を理解できない多くの人が，無意識のうちにそれらの曲から強いメッセージを受け取り，「Icelandic Music」の持つ魅力の虜になるのだ。それは「Icelandic Music」自体が「言葉」の役目を果たし，人々にメッセージを伝えているから，と言えるのではないだろうか。また，ホープランド語の「楽器としての言葉」

という点に注目すると，RímurやTvísöngurとの共通性も見える。RímurとTvísöngurが「音楽になった言葉」であるとすれば，ホープランド語もまた同様に,「音になった言葉」といえるからだ。ホープランド語は，Sigur Rósが作り出した，新たなTvísöngurの一種といえるかもしれない。

さらに,「音楽はアイスランド人にとっての言葉になった」という筆者の仮説を裏付ける理由のひとつとして，RímurとTvísöngurが持つ最大の特徴も忘れてはならない。RímurやTvísöngurで歌い継がれてきたことは，アイスランド人が後世に伝えたかった祖先の誇りと，自分たちの歴史であった。彼らは『サガ』と言う文書だけでなく，最も伝え残したかった物語を音楽に載せ，伝承してきた。『サガ』がそうであるように，文字にして書き残すことは，後世に何かを伝え残すのに，非常に有効な手段である。また，詩の朗読も，物語の伝承には十分な方法である。しかしアイスランド人は，書き残すだけでなく，朗読するだけでなく，物語を音楽で表現し，伝え残す方法を選んだ。独特のリズムや抑揚なしでは，彼らが後世まで語り継ぎたいすべての事柄や思いは，表現できないのだ。RímurとTvísöngurは，音と共にあるからこそ，意味を成す。それは,「音楽」自体がアイスランド人にとっての「言葉」になったからだとはいえないだろうか。

アイスランド人にとって音楽は，必要不可欠なコミュニケーション・ツールであり，その音楽にはアイスランドでしか形成され得なかった数多くの特徴がある。「Icelandic Music」には，アイスランドの歴史，文化，そしてアイスランド人としての誇りと母国に対する愛が込められている。この揺るぎない崇高な誇りと，自国を想う強い愛が核心に存在するからこそ，「Icelandic Music」は世界中でも唯一無二の魅力を持った音楽となる。そしてその音楽が「Icelandic Music」であるからこそ，アイスランド人のみならず世界中の人々の心に訴えかけ，虜にするのだ。

おわりに

2008年10月６日，いつもは目立たない北の果ての小さな国から，全世界に向けてある声明が発せられた。「最悪の場合，国家が破綻する危険性もある」と言うハーデ首相の言葉は，全世界の人々に衝撃を与えた。アメリカのサブプライム・ローン問題が発端となった全世界を巻き込む金融危機の影響を最も強く受けた国が，筆者が愛してやまないアイスランドであった。アイスランドの名前がこんなにも日本のニュース番組から聞こえてきたことは，今までただの一度もなかった。今回のことでアイスランドの存在を知った日本人も多いのではないだろうか。2008年12月10日現在，IMFやEUによる，アイスランドの経済崩壊に対する具体的で有効な策は，まだ発表されていない。もともと物資が乏しかったアイスランドは，漁業や地道な努力と勤勉さによって，世界でも有数の優良国家になった。しかしいくら優良国家となっても，人口の少なさや立地による環境の厳しさは今も昔も変わることはない。これからIMFやEU，北欧諸国からの手厚い援助が得られることを望むばかりだが，アイスランド再建の道は，かつてアイスランドが抱えたいかなる問題よりも，解決が困難で厳しいものになるであろう。しかしアイスランドは，この論文で述べたように大変に素晴らしい国であり，またアイスランド人の自国を想う愛は，他のどこの国民にも負けないほど強い。アイスランド人はこれまでのように，この建国以来最大の困難も，きっと乗り越えるはずである。

だが，この論文で述べた，そのままのアイスランドの姿が残るかどうかは，難しいところであろう。実際，この経済破綻が起きる前から，アイスランドの安くて膨大なクリーン・エネルギーに目をつけた外資系企業が次々とアイスランドへの工場建設を持ちかけている。筆者がアイスランドで訪れたコンサート「Náttúra」では，これらの工場建設による環境破壊への反対も強く訴えていた。また，Sigur Rósのドキュメンタリー映画「Heima」では，工場への電力供給のために犠牲になったアイスランドの自然が映し出されていた。し

かし多くのアイスランド人は，この「クリーン・エネルギーを得るための環境破壊」という本末転倒な行為に疑問を持ち，反対の声を上げている。経済崩壊によるアイスランド再建には多額の資金が必要であるため，今後もこのような自然売買と環境破壊が行われることは想像に難くないが，きっとアイスランド人は賢明な判断を下し，アイスランドを守ってくれると信じている。

「Icelandic Music」に存在する荘厳で雄大なアイスランドの自然，そして尊敬してやまない彼らの祖先から，受け継ぎ，守ってきたアイスランド人としての誇りは，彼らの揺るぎないアイデンティティの核心である。孤高の勇者たちの血を受け継ぐアイスランド人が「世界最高のアイスランド」をこれからも守り続けてくれることを，強く願ってやまない。

注

1）アイスランド：正式名称Lýðveldið Ísland（アイスランド共和国）。930年，世界初の民主議会Alþingi（アルシンギ）が設立されたのをきっかけに，独立国家となる。2008年現在，人口は約31万人，面積はおよそ10万3000㎢。首都はReykjavík（レイキャヴィク）。「アイスランド」は英語に基づく呼称であるが，アイスランド語でもÍsland（ís：氷，land：国）と呼ばれる。Ísland は，綴りが英語で島を表すIslandと似ており誤解を招く恐れがあり，また「アイスランド（Iceland）」の方が世界的に浸透しているため，この論文では「アイスランド」という呼称を使用する。

2）Sigur Rós（シガー・ロス）：1994年に結成され，現在も活動中のバンド。Jón Þór Birgisson，Kjartan Sveinsson，Orri Páll Dýrason，Georg Hólmの男性４人で成り立っており，全員アイスランド出身。1999年に発売された３rdアルバムは全世界で100万枚以上のセールスをあげ世界的に人気を博するようになった。

3）2008年４月現在，北海道は約83000㎢，四国は約19000㎢，計10万2000㎢。　『国土地理院ホームページ』

4）2008年８月現在，和歌山市の人口は約37万人。　『和歌山市ホームページ』

5）サガ（Saga）：アイスランド語で歴史や文化の意味を持つ言葉であるが，この論文では一般的に「サガ」と呼ばれる散文詩を含む物語を指す。主に1120年頃からアイスランド人によって書き記され，現在まで残る古文書。アイスランドのみならずノルウェーなど，当時のアイスランドに関係した国々で起こった出来事や歴史・文化が記される。当時の庶民の生活の詳細が，客観的視点からまとめられているのが特徴であ

る。

6）アイスランド人の大半の祖先はノルウェー・ヴァイキングであるが，彼らはアイスランドへの移住に際し，複数のケルト人奴隷を伴ったことが判明している。移住が完了するとケルト人奴隷は解放され，ノルウェー・ヴァイキングたちと同様に家庭を持ち，土地を保持し，生活した。現代アイスランド人の中にもケルト人がルーツの人々は少なからずおり，それはアイスランド独特の氏名制度や遺伝子分析からも裏付けられている。

7）ハラルド美髪王（Haraldr hárfagri）：それまで諸地域の豪族によって別々に統治されていたノルウェー全土を，初めて統一した王。

8）ヴァイキングの祖国では，ヴァイキングは「英雄」や「勇敢な海の戦士」など，とてもポジティブに捉えられ，また憧れの存在であった。一方ヴァイキング行為の被害に遭っていた国々はヴァイキングを「野蛮」「悪魔」など，忌み嫌っていた。しかし14世紀頃から，ヴァイキングは，かつて被害に遭っていた国々でもポジティブに扱われるようになった。主にヨーロッパ各国に残る歴史的書物にも「英雄」など，好意的な言葉で記されている。ヴァイキング行為は，厳しい環境の国で農耕を行うよりも効率的にお金を稼ぐための「産業」のひとつであった。

9）1940～1941年，アイスランドを保有していたデンマークはナチス・ドイツ軍の占領下に置かれ，植民地であったアイスランドはイギリスに占領された。さらにその後はアメリカ軍の支配下に置かれた。

10）アイスランド共和国の国旗：

土台の青色は海，十字の赤色はマグマ，その周りの白は氷河を表し，それぞれアイスランドの自然の象徴的な色が使用されている。十字のデザインは他の北欧諸国と同様で，国教のキリスト教（福音ルーテル派）を表現している。

11）リチャード・セール，石川真弓訳『アイスランド人のまっかなホント』マクミランランゲージハウス，2000年，28ページ。

12）北欧語（Norræn mál）：北欧語や古ノルド語と呼ばれる言語。８世紀から14世紀までアイスランド，ノルウェー，デンマーク，スウェーデンなど，ヴァイキング文化の国々で利用されていた言葉。語彙や発音など，北欧語の特徴を最も残しているのが現代アイスランド語である。

13）アイスランド語話者は約32万人と言われている。内訳はアイスランドの総人口31万人と，カナダへのアイスランド人移民（約１万人）である。

14）ギャウ（Gjá）：Þingvellir（シングヴェトリル国立公園）にある，北米プレートと

ユーラシア・プレートの合流部分。「地球の割れ目」と呼ばれ，このようなプレートの合流部分は通常海底にあるため，目にすることができない。ギャウが地上で見られるのは，アイスランドとアフリカのみである。

15）『気候変動枠組条約・京都議定書，京都議定書　附属書B』。『環境省ホームページ』

16）北欧多神教：キリスト教の伝承以前，アイスランド，ノルウェー，デンマーク，スウェーデンで信仰されていた宗教。ゲルマン神話の一つで，北欧神話（Norræn goðafræði）に基づいている。Orðin（オーディン）と呼ばれる戦いの神を主神とした，多神教。北欧多神教の「いかに勇敢に戦い，死んだかで，自分の存在価値が高まり，死後も名誉が続く」という考えは，海を渡り，「闘争」に明け暮れ，常に死と隣り合わせで生きてきたヴァイキングに大変好まれた。また，「北欧多神教」という言葉はどの言語にもない。北欧神話，もしくはPagan（異教）という語が用いられる。しかし筆者は，差別的な意味が付随する異教という言葉は適切でないと考えている。また北欧神話という語は神話自体を表す語でもあるため，この論文では「北欧多神教」という言葉を使用する。

17）ホープランド語（Vonlensku）：Sigur Rósがアイスランド語を基に作り出した架空の言語。言語といえども実際はほとんど意味がなく，「音」としてメロディーに合う言葉を作り出しているらしい。2002年発売のアルバムに収録されている曲はすべて，ホープランド語で歌われている。その他にも数曲ホープランド語詞の曲があるが，大半はアイスランド語で歌われており，英詩の曲も若干ある。

参考文献・映画・ホームページ

グンナー・カールソン，岡沢憲芙監訳，小森宏美訳『アイスランド小史』早稲田大学出版部，2002年。

イヴ・コア，久保実訳『ヴァイキング―海の王とその神話』創元社，1993年。

リチャード・セール，石川真弓訳『アイスランド人のまっかなホント』マクミランランゲージハウス，2000年。

邸景一・柳木昭信『アイスランド　フェロー諸島・グリーンランド―素晴らしき自然景観とオーロラの魅力』日経BP企画，2005年。

山室静『サガとエッダの世界　アイスランドの歴史と文学』社会思想社，1982年。

Ari Alexander・Ergis Magnusson監督『Screaming Masterpiece』エイベックス・エンタテインメント，2005年。

Dean DeBlois監督『Heima』EMIミュージック・ジャパン，2007年。

藤井知昭監修『音と映像による新世界民族音楽大系』第21巻，日本ビクター，1995年。
Iceland org　http://www.iceland.org
eighteen seconds before sunrise（Sigur Rós official Website）http://www.sigur-ros.co.uk
環境省ホームページ　http://www.env.go.jp/index.html
国土交通省国土地理院ホームページ　http://www.gsi.go.jp
総務省統計局ホームページ　http://www.stat.go.jp
和歌山市ホームページ　http://www.city.wakayama.wakayama.jp